

ピンクの薔薇

雪

今日も眠れそうにない。園子はそろそろと布団を抜け出し、冷蔵庫からコンビニで買っておいいた青梅のサワーを取り出し、リビングのソファに座った。

寝室に使っている隣の和室からは、夫のグワーツという耳障りないびきが聞こえてくる。―――全く。

園子は苦々しいものがこみ上げてくるのを押し込めるように、酒というよりは甘ったるいジュースのような液体を喉に流し込んだ。

夫が私を抱かなくなってから一体どのくらいたつのだろう。付き合っていた頃は会うたびにあんなに私を抱きたがったのに。

結婚して10年。月日と共に夫婦が体を重ねる回数は減り続け、今では3ヶ月に1度あるかないか。

大体それだって耐え切れなくなった園子がヒステリーを起こし、それにうんざりした夫がいかにもいやいやといった感じでおおいかぶさってくるだけ。夫から園子を求めることはない。

濃厚な愛撫などとは程遠く、まるで中学生のような味も素っ気もないセックス。

割れ目をちょいとなぞり、それなりに濡れているのを確かめ、入れて動かして終わるだけ。

始めから最後まで夫はずっと目を閉じていることもある。

相手から見つめられることもなしにする行為がどれだけ女にとって寂しいものか夫にはわからないのだ。

しかし、そんな愛情も何も感じられないセックスでも、夫のものが入ってくると待ってましたとばかりに腰を振り出してしまふ、飢えに飢え切った自分の体が園子は悲しくてならない。

また非情に屈辱なのは、夫がいつからかクニリングスを全くしてくれなくなったことだ。なのに必ず園子には自分のものをくわえさせる。

そうしなければ夫のそれが使用可能な状態にならないから仕方がないといえばそうなのだが、こんなところも女は損だと園子はつくづく思う。

セックスがしたければ、たとえ男が同じ行為をしてくれなくても女はそのために奉仕しなくてはいけない。

目を閉じたまま仰向けにひっくり返っている夫の股間に顔を埋め、必死で尽くしている自分がみじめで、園子はいつも泣きながら夫がごくたまにお情けのようにくれるセックスを受けている。20代の頃は間違っても「セックス」などと人前で口にすることはなかった。それが今ではあまりに長い間放っておかれるせいだろうか。

「セックスして。ねえセックスしてよ。お願い」

夫に向かって平気でそんなことを言えるようになった園子だが、さすがに

「舐めてほしいの。どうして舐めてくれないの？」

とは口に出せない。

羞恥心というよりは女のプライドのような気がする。頼み込んで嫌々してもらったところで、どう感じるができるだろう。

あっという間に青梅サワーの缶は空になった。体質的にアルコールにはそう強くないため、普通ならこれくらいで眠気が襲ってくるのだが今夜はまだとても眠れそうにない。

生理が終わって10日程過ぎた排卵日の頃はいつもこうだ。男のあれが欲しくて欲しくて体の芯が耐え難いほどの疼きに襲われる。

これは子孫を残すという生物の本能なのだろうか。

園子は眠れないままリビングの隅においてあるパソコンの電源を入れた。

あちこちいじっているうちに画面に女の裸が現われた。大きく開いた足の間にあまり鮮明ではないが女の部分が映っている。

園子の手が自然にショーツの中に伸びた。

他の女はどうか知らないが園子はグラビアなどに載っている知らない男の裸を見て感じるということはない。

妙に筋肉ばった白人の裸などはどうにも気持ち悪くて感じるどころか目をそらしてしまう。

それよりもあられもない格好をした女の裸を見ている方がずっと興奮するのだ。

それは男が女の裸を見て興奮するのとは当然違って、その女に自分を重ねて見るからだろうと思う。

この画面の中で大股開きをしてあそこを丸出しにしているのは私。私のいやらしいあそこがみんなに見られている。

そう思うだけで園子の指はもう止まらなくなってくる。

今までに何度も夫の寝ている寝室とふすま一枚で敷きられただけのこの場所でオナニーをしたことがある。

「ああ...ん」

思わず切ない声が漏れるが夫が起き出したことは一度もない。規則正しくいびきの音が続くだけだ。

ああ、セックスがしたい。あんなおぎなりのセックスじゃなくてきちんとした大人のセックスがしたい。そして私の...ああ、ここをザラザラの舌でめちゃくちゃに舐めて欲しい。

園子は気が狂ったように中指を真珠の上で回転させた。

「アッアッアッ.....ああーんッ」

最後に自分でもびっくりするほど大きな声が出たが、隣室からはいびきがまだ続いていた。

我に返った時はいつも切ない。どうして夫は私を求めてこないのだろう。いつまでこんなに孤独な夜を耐えればいいのか。

夫がいて子供がいて家庭がある。そんなに贅沢はできないけれど夫の収入で食べていくには困らない。

人から見れば私は幸せな主婦ということになるのかもしれない。なのにこの体を突き抜けるような寂しさは何だろう。

セックスがない。夫が一番愛して欲しい場所を愛してくれない。

そんなことで悩むのは贅沢なのだろうか。それとも他の女性に比べて私の性欲が強すぎるのだろうか。

むき出しになったままのクリトリスがジンジンとほてって泣いている。こんなに...こんなになっているのに満たされない。

たまらなく悲しくなって園子はたった今歓喜の声を上げたばかりの口元からおえつをもらした。

朝からジットリとねばりつくような雨が降り続けている。

今日は週に一度仲のいい主婦たちが集まって活動しているバレーボールチームの練習日だが、この天気のせいかどうかにも出て行く気が起きない。

園子は同じ団地に住む主婦に休みの連絡を入れると下のポストに郵便物を取りに行った。

集合住宅のポストには感心するほど毎日いろいろな種類のチラシが投げ込まれている。

宅配ピザ、中古マンションの案内、健康食品...テレクラのティッシュが入っていることもある。

園子は重要な郵便物だけを取り除き、それらのチラシ類をポイポイと屑かごに捨てていった。

「何？これ」

園子は1枚のチラシに目を止めた。ピンク色のB5サイズの手紙に大きく『女性のためのクラブ ピンクの薔薇 新規OPEN』とある。

『あなたは日常生活に不満がありませんか？当店選りすぐりの男性があなたの不満を解消し、素晴らしい時間を過ごすためのお手伝いをいたします。まずはお気軽にお問い合わせを』

書いてあるのはこれだけだが、妙に気になりそのまま他のチラシと一緒に捨てるのがなぜかできなかつた。

女性のためのクラブって何だろう。ホストクラブのことだろうか。

でもそれならお問い合わせを、なんてわざわざ書いてあるわけではないし...

午後になってから、園子は勇気を出してチラシの電話番号にかけてみることにした。危なそうな感じだったらすぐ切ってしまえばいい。

「はい、ピンクの薔薇です」

コールしてから若い女の子の声が出た。

「あのチラシを見てかけているんですが」

「ありがとうございます」

「そちらはどういうお店なんですか」

「はい。基本的にはデートクラブが男女逆になったようなものとお考え下さい。よろしければ詳しい内容をFAXでお送りいたしますが」

女の子はその若い声と不似合いなほどに完璧な敬語を使って言った。

しばらくして送られてきた紙にはこう並んでいた。

『ピンクの薔薇 オーダー表』

① デート 1時間2000円（3時間より） 飲食事代、交通費別

② ディープキス1回1000円

③ 首筋、耳たぶ、胸、足の指 各5000円

※他にもお好みのパーツがございましたらお申し込み頂けます。

④ 局部 指のみ 5000円

⑤ クンニリングス20分 1万円

⑥ セックス 1回3万円（腕枕のサービス付き）

※フェラチオはお客様がご希望の場合のみ受け付けます。

※お好みの男性のタイプをお電話でお申しつけ下さい。交換は何度でも可能です。

ご希望の方には男性のカタログをお送りします。

他ご不明な点がございましたらお問い合わせ下さい。

園子は紙に並んだ文字を目で追っているうちに体の中心がじんとしびれてくるのを感じた。

これは何？こんなお店があったなんて。

まるで美容院のメニューのようにセックスだのクンニリングスだのという言葉が事務的に並んでいる。

クンニリングスが20分1万円という金額は高いのか安いのか園子には見当もつかない。

初めは面食らったが時間がたつうちにこれは案外いいシステムかもしれない、と思えてきた。ここまではっきりキスがいくら、セックスがいくらと明記されているとかえってこちらも気楽にいけるというものだ。

「申し込んでみよう」

そう決めた瞬間、園子はやっと救われた気がした。

大体この世の中、お金さえ出せば男が女を買うことはたやすいが逆のケースは難しい。

ホストクラブなど興味はあっても普通の主婦にとってはなかなか行く機会がない。

かといってテレクラや携帯電話の出会い系サイトなどに手を出すのはどうも怖い気がする。

それに園子はどんなに体が乾いていたとしても見知らぬ情も何もない男と寝る気にはなれない。

男と違って「男なら誰でもいいからとりあえずやりたい」と思う女はまずいないだろう。

外見的にある程度の水準に達していない男の前では到底そんな色気はわいてこない。

その点、このシステムなら事前に好みの男を選べるわけだし、初めから全くのビジネスとわかっている分、割り切ることができる。

女に買われることを仕事にしているわけだからそう変な男もいないだろう。

収入のない主婦にとって決して安い買い物ではないが、これは夫がセックスをしてくれない罰だ

。

前に何かのドラマで「夫が妻とセックスしないのは家庭内暴力と同じだ」というセリフがあった

。

全くその通りだと園子は思う。

セックスしない本人はいいとして、健全な性欲を持った方はどうすればいいのだろう。

気の狂うような欲情に日々耐えなければいけないというのか。何のために？

お金がなければ働けばいい。病気なら病院に行けばいい。でもすぐそばに男がいるのに、セックスしたいと思う相手がいるのにセックスできない。

こんな苦しみがあるだろうか。

午前10時少し前。

園子は自分で指定したカフェでカプチーノを飲みながら、もうすぐ来るはずの男を待っていた。「ピンクの薔薇」に伝えておいた希望は、外見はスッキリしょうゆタイプ。身長は175cm以上。適度に筋肉のついた身体。肩幅があって二の腕がガッチリたくましければ尚良し。デブ、ハゲ、チビは絶対ダメ。年齢は22才から27才位まで。

普段園子はどちらかという自分が甘えたい方で男は年上好みだが、今回は最初から目的が決まっている。そこにはいつもなら男に求めるはずの頼り甲斐や経済力などは必要ないのだ。どうせ買うなら若くていきのいい方がいいに決まっている。

「すみません、岡田園子さんですか？お待たせしました」
はたして目の前に現われた男は園子の好みにピッタリ一致していた。
浅黒い肌に福山雅治系の顔立ち。年は23くらいだろうか。

Tシャツの上は無造作にはおった白いシャツが育ちの良さそうな雰囲気を一層引き立てている。
「うちはとびきり見てくれの良い男性ばかりを揃えています。お客様に絶対損はさせません」
「ピンクの薔薇」の若い女が電話でそう自信ありげに言っていたことを思い出す。

正直言うと園子は男の質についてはあまり期待していなかった。
そう簡単に好みに合った男に当たるはずがない。

それならそれで妥協してもいいやなどと思っていたが、実際今日の前にいる男はそれ以上と言ってもよかった。

「多田秀人といいます。22才です。今日はよろしくお願いします」
秀人は丁寧な言葉づかいでペコリと頭を下げた。

「22才...若いのね」

園子は思わずため息交じりにつぶやいた。

あからさまで恥ずかしいが、30を越えて数年たった女にとっては、よだれがでそうな年頃である。

「でもあなたどこかで見た気がするんだけど」

「そうですか」

「えーと、どこでだったかしら」

園子は頭の中で懸命に記憶をたぐりよせた。

「そう、そうよ、あなた夏にどこかでバイトしていなかった？」

「はい。学校の近くのプールで、監視員のバイトやりました」

「やっぱり。私今年の夏に何回もあそこに行ったのよ。どうりでどこかで見かけた顔だと思ったわ」

そうだった。園子は夏休みに子供を連れて通ったプールの風景を思い出した。

そのプールでは監視員のバイトに大学生を何人も使っていて、プールサイドに若い男の子たちががん首揃えて立っている様はまるで男の品評会のようなようだった。

そしてその中でも秀人は飛びぬけて綺麗な男の子だった。

肌寒い日でも無理に通ったのは決して子供のためだけではなかった。

自分自身の目の保養のためもあったのだ。

「もうお部屋に行っていていい？あまり時間がないの」

園子は秀人がSサイズのカフェ・ラテを飲み干したのを確認してからズバリと聞いた。

本来ならゆっくりランチでも、という段取りになるのだろうがそれからホテルに行ったのでは子供の帰宅時間に間に合わない。

「いいですよ。園子さんのご都合に合わせてます」

「じゃあ、行きましょう」

園子は努めて冷静に言うと、やたらに長い足のついた椅子から体をすべらせた。

普通のホテルじゃない、いわゆるラブホテルに入ったのは独身の頃以来だから10年ぶりだ。面積のほとんどをベッドが占領している部屋。枕元にさりげなく置かれたコンドーム。半分ガラス張りのバスルーム。

一歩足を踏み入れただけでまるで始めてこういう所に入った高校生のように胸がドキドキしている。

「シャワーはどうしますか」

さりげない動作でシャツを脱ぎながら秀人が聞いてきた。

「あなたは使うの？」

「一緒に入りますか。料金には含まれないですから」

そう言われて園子は一瞬戸惑った。2・3年前なら何とかなっただけかもしれないが最近はやたらと下腹が出てきて困っているのだ。

明るい照明の下で自分より10才以上も若い男の前で裸をさらすのはかなり勇気がいる。

「ううん、私は...」

「じゃあ、どうぞ。僕らお客さんと会う前にシャワーは済ませておくことになってるんですよ」なら、「一緒に入ろうか」と秀人が聞いたのは全くのサービスということなのだろうか。

園子は石けんを泡立て、性器をいつもより丁寧に洗った。

園子が「ピンクの薔薇」にオーダーした通りにことが運べば今日はクニリングスを20分たっぷりしてもらえることになっているはずだ。

あと数分で何年かぶりにここを舐めてもらえる。

ああ、ここもそしてここにも秀人の舌が這うのだ...・園子はシャワーを当てながら幾度も体をビクンと震わせた。

バスルームを出ると部屋の中はちょうどいい薄明かりに調節されていた。

さすが30過ぎの女の心情をちゃんと心得ている。

園子はバスタオルを巻きつけたままの格好で秀人が待っているベッドの中に体をもぐりこませた。

そして昔、夫によくそうしていたように秀人の胸の辺りに子猫が甘えるように顔をすり寄せた。かすかに男の汗の匂いがする。この独特の匂いが女にはたまらない刺激剤となるのだ。

秀人の腕がその子の体を優しく抱いた。

舌をからめるキス。耳。首筋。秀人の形のいい唇が園子がオーダーしておいた箇所を正確に旅していく。

乳首への愛撫の流れでオーダーした覚えのない脇の下を舐め回された時は思わず体が跳ね上がるほど反応した。

なぜだろう。腕を持ち上げられながら脇の下のくぼみを責められているとついあの部分への愛撫を連想してしまう。

園子はもどかしさに体をくねらせながら低いうめき声を上げた。

やがて秀人は体を起こし、園子の両足を一気に開いた。

ああ...いよいよだ。園子は泣き出したいほど興奮していた。

早く、早く。早くして！！

秀人はそんな園子をじらすかのように、まず園子自身を両手で優しく割ると、あらわになったその部分にゆっくりと顔を近づけていった。

薄明かりとはいえ、やはり恥ずかしい。これでは奥の奥まで彼に見られてしまう。

「ねえ、あまり見ないで」

園子はたまらず懇願するように言った。

「何で？園子さんのここ、すごく綺麗ですよ。赤いのがヒクヒクしてる」

秀人の舌がいきなり園子の体の中で一番敏感な真珠を捕らえた。

そして舌全体を使ってその小さな小さな突起をこねくり回す。

「ああ————っ！！！」

そうされた瞬間、園子は背中をのけぞらして歓喜の声を上げた。

それは、自分でも驚くほどの絶叫で、演技など少しも入らない心の底から出た声だった。

だって本当に久しぶりに舐めてもらったんだもの。

夫がしてくれなくなってから私はずっと孤独だった。辛かった。私の花びらが泣いている。寂しかったと言ってほら、こんなに涙を流している。

「そんなにいいですか」

舌先を動かしたまま、秀人が目だけを園子に向けて言った。

「うん...すごい。すごくいい」

「ねえ、どこがいいのかははっきり言ってみてよ」

秀人の口調が客に対するそれから急に普通の男のものに変わった。

「嫌、言えない」

「じゃあやめちゃうよ」

「だめ！やめないで！」

園子は思わず秀人の頭を抱きかかえて叫んだ。

やめてほしくない。もっともっと続けていて欲しい。

この時の園子の頭の中には自分はお金を払った客であって、その事実がある以上、秀人には行為をやめる権利はないなどという理屈は何も入ってはいなかった。

ただただ孤独の淵に引き戻されてしまうことが怖かった。

「じゃあどこが気持ちいいのか言ってみて」

「...」

「え？何、聞こえないよ」

「クリ...トリス...」

「そうか、じゃあここは？」

そう言って秀人は舌を園子の内部に差し込んだ。ジュン、と体の中を電流が貫く。

「ああっ。オマンコ、オマンコが気持ちいいの」

その言葉を生まれて初めて口にしたことで園子の中の何かが音を立てて崩れた。

「そこそこ、そこを舐めて。もっと舐めて。ベロベロって。そう、そうよ。ああん、いい、いい。気持ちいいーっ。もう最高にいいのお！」

わめきながら、園子は本気で泣き出していた。

今ならなんでもできる気がする。今までしてみたくてもできなかったこと。

「お願いがあるの。いい？」

「はい。何でも」

園子は秀人の目の前でそっと自分の花びらに触れた。

そしていつもするように中指でクリトリスを探り、別の指を軽く中に入れしごき始めた。

「一度でいいから...・誰かに見られながら...こういうこと...してみたかったの」

「いいよ。僕がずっと最後まで見ていてあげる。園子さんが好きなようにしてみせてよ」

園子はしゃくりあげながら秀人の視線の前で一人遊びを続けた。

夫が園子の体に触れもせず、寝てしまった夜にしていたように。

むき出しにしたクリトリスをこすり、しごいた。秀人はじっと園子のそこを見ている。

さっき秀人は「きれいだよ」と言ってくれたけど、嘘だ。こんなところ全然綺麗なんかじゃない

。

何回も鏡で見たことがあるけれど、どす黒くてとってもグロテスク。それなのに...

「園子さん、すごく綺麗だ。最高に綺麗だよ」

秀人が耳元で囁く。

もう死んでもいい。本気で園子はそう思った。

「あーん、気持ちいい。園子のオマンコ気持ちいいよおおお」

自分の指で絶頂を迎えながら、園子はまるで幼児のように本能のままを口にし、叫んだ。

「園子さんって見られるの好きなんだ」

「うん...」

「何だか僕、本気で感じてきちゃったよ」

秀人はいたずらを見つけた少年のように笑い、園子の上におおいかぶさってきた。

固くて園子にとっては懐かしい感触のものが園子のあそこに触れた。

そして園子の手を全くわずらわせることなくそそり立ったソレが園子を押し開くように侵入してきた。

ああ。久しぶりに潤った泉に男が入ってくる。

求めても求めても水を与えられることなく枯れ切っていた体が泣いている。嬉しくて泣いている。

園子はたまらなくなり、狂ったように腰を振った。

私はこんなに飢えていたんだ。客という立場とはいえ、初めて会った人の前でいやらしい言葉を叫び、自分でクリトリスをいじり、やっとおもちゃを買ってもらえた子供のように泣き出してしまう程私は飢えていたんだ。

自分がかawaiiそうでならなかった。

改めて自分をここまで追いつめた夫を園子は憎いと思う。

秀人は園子に合わせて腰を動かしながら同時に右手の指でクリトリスの皮をむき、痛いほど立った乳首を舌で転がしている。

秀人は私を抱きながらどう思っているのだろう。

園子は押し寄せる快感の波の中でふとそう思った。

自分ではまだ十分に若いつもりだけれど、秀人から見たらもう私は立派な中年女だ。

そのオバサンがみっともなくワンワン泣きながら発情したメス犬のように腰を振っている。よほど男に飢えていた気の毒な女だとでも思っているだろうか。

秀人が園子の両足を高く持ち上げた。園子の深いくぼみが秀人のものでいっぱいになる。

「ああっ、すごい、もっともっと奥まで、もっと——！」

もうどう思われてもいい。今はこの乾き切っていた体にたっぷりとお水を与えてやらなければ。

そう、お金なんかいくらかかってもいい。

これで私は明日からしばらく生きていけるのだから。

園子は秀人の骨張った背中をかき抱きながら、最上級のエクスタシーへと続くはずの波に体を預けて目を閉じた。

その夜は地獄だった。たっぷり栄養を補給したので今夜は久しぶりにゆっくり眠れるだろうと思っていたのに、それは大きな誤解だと気付いた。

昼間、あんな体験をしたせいなのか体の芯がポッポとほてって眠れないのだ。

「まだ足りないの。もっともっと、もっと水をちょうだい」

と、体が欲しがっているのがわかる。

とても我慢できずに園子は初めて夫の隣でオナニーをした。

パンティの中に手を入れクリトリスをさわる。

昼間、秀人の舌で唇で何度も触れられた場所。いつもより充血して熱くなっている気がする。

今までならここまで気持ちが高まれば、嫌がられるとわかっていてもつい隣で寝ている夫を起こそうとして、案の定拒否されて傷つき一人涙を流すというパターンが常だった。

でも今夜は違う。もう男としての盛りが終わってしまったような夫なんかいない。

園子は指の動きを早めながら目を閉じた。

最後の瞬間、切なそうに眉根を寄せた秀人の表情がまぶたの裏に浮かんでくる。

ああ、もう耐えられない。

園子は太股にからまっている小さな布切れをはぎとり、布団から跳ね起きた。

園子はお風呂場の壁にはめこまれた大きな鏡の前に腰を下ろし、足を大きく開いた。

茂みの奥の秘所がパツクリと口を開けて現われた。いつ見ても目をそむけたくなるほど、不気味な場所だ。

何だって男は、女のこんなところを見たがり、触れたがり、愛してくれるのだろう。

生理だのおりものだの、しょっちゅう何かをたれ流しているこんな汚いところを...

いや、これほど醜いからこそ女はここを男に見られ、触られ、愛されることを至上の喜びとするのかもしれない。

園子は鏡を見ながら自身の手ですでにビショビショになった割れ目を裂き、ビラビラのひだや更にその奥の芯、そして愛しい愛しい芽を体を感じる快感のままに触れ、遊んだ。

「アン...」

思わずエコーがかかった声がもれる。

もう夫のことは頭の片隅にもなく、ただひたすらに秀人のことだけを思い園子は幾度も頂点までたどりついた。

今夜は私どうしたのだろう。

園子はお風呂場の床に体を投げ出したまま、まだ終わりのこない体をもてあましていた。

喜びを感じれば感じるほど「もっともっと」と、飢え過ぎていた体が要求してくる。

もっともっとちょうだい、ずーっと忘れていた快感...ああ、欲しい。欲しいよ。もっともっと...

一度蜜の味を覚え、走り出した女体はもう誰にも止められない。

園子はほとぼしるシャワーのしぶきを全身に受けながら、体の奥底から突き上げて来る熱いものを感じずにはいられなかった。

数日後。園子は「ピンクの薔薇」に再度電話をかけた。できることならもう一度秀人に会いたかった。

呼び出し音が切れ、園子が「もしもし」と言うと、受話器の向こうから聞こえてきたのは、「はい、〇〇区役所、総務課ですが」

あの敬語の上手い若い女の子の声ではなくなぜか野太い男の声だった。

— どういうこと？

「あの、そちらは『ピンクの薔薇』では...？」

戸惑いながら園子が切り出すと、相手は

「はあ？」

と、あからさまにいぶかしげな声を発した。

園子はそれ以上、話すのをやめ、静かに電話を置いた。

一体どういうことだろう。『ピンクの薔薇』はどこに消えてしまったのだろう。

あの日、私は確かにこの番号に電話をしたはずなのに。

念のため、手元のチラシに書かれた番号を確かめてみたが間違いない。

もしかしたら...『ピンクの薔薇』。あれは夢だったのだろうか。

女としての欲求に飢えたかわいそうな私を見かねて、神様が与えてくれたひとときの夢。

それならそれでもいいと園子は思った。

なぜならあの日から自分の中で何かが確実に変わったのを感じるから。

それはたとえビジネスとはいえ、いつときでも秀人のような綺麗な男に愛されたことで、女としての自信が芽生えたせいかもしれない。

夫に求められもせず、求めても拒否されていたみじめな自分。

それがあの経験のおかげで今はもうどこにもいない。

今もどこかに様々な理由で自信をなくしている女性がいたら、ぜひ見つけて欲しいと思う。

夢への入り口を。誰のためでもなく、大切な自分自身のために。

園子は握り締めていたピンク色のチラシをビリビリと破くと、ベランダから空に向かって放り投げた。